

一九三八年の北京に於ける竹内好と「鬼」の発見

——ある「惨として歓を尽くさず」の集まりを中心として——

王 俊 文

I 佐藤春夫一行の歓迎会

一九三七年七月七日「盧溝橋事変」が勃発、その三ヶ月後に、二七歳の竹内好（一九一〇〜七七）は外務省文化事業部留学生として北京に着いた。一九三八年五月に北京にやってきた佐藤春夫、保田与重郎一行を歓迎する為、二十日に竹内好「および尤炳圻、方紀生ら若いものたち」⁽¹⁾は周作人など北京に残っていた中国文化人を招いて宴会を催している。この時期の佐藤春夫一行、竹内好、周作人に関連する活動は注釈に詳しい。⁽²⁾

歓迎会の様子は、竹内好の回想文に描かれており、⁽³⁾その中で竹内がこの歓迎会にこだわったのは、同会の直後の佐藤春夫の報告「蒙疆——張家口」で、この集まりを「惨として歓を尽くさずといふ程ではないが、何やら影のさすやうな気分⁽⁴⁾の失せぬものがあつたのは是非とも無い」と形容したためである。

これを読んだ竹内は、佐藤に手紙を送り反対意見を述べた：⁽⁵⁾「あの夜の小集はまづい歓迎の辞や妙な社交辞令など一切ぬぎの滋味なものであつただけにのんびりと温かみのある北京の文人ならでは見られない温雅ない集まりであつた」⁽⁶⁾。

続けて、佐藤春夫は一九四一年四月「東亜文化協議会評議員」の肩書きで来日した周作人の東京訪問に合わせる為に草した「日華文人の交流」で、竹内好の「軽い抗議」を認め、自分の「鈍感」を反省しつつも、「あの当時あの空気のなかであれだけなごやかな会合が行はれた事には多大の感銘」を確かに受け取ったと記している。

半年後、竹内好は「佐藤春夫先生と北京」で再びこの集まりにふれ、「むしろ僕の感じでは主客ともに飲を尽くしたつもりなのである」と述べ、続けて「周作人が、あのような会に列席したのは事変後はじめてである」ことはおそらく事実であろうが、「しかしそれはとりたてて云うほどでもないことなのである」と記している。竹内はまた「僕は強いてあの会を、何でもない、あたり前のものに仕立てたがっていたようである」と自嘲的に語っている。文章の末尾でも、竹内は「折があつたら、この問題についても改めて先生の御意見を伺いたいと思つている」と述べ、「この問題」に対して依然として納得しえない様子を表明した。⁽⁷⁾

II 先行研究と問題意識

これまでも佐藤春夫研究、竹内好研究は、佐藤一行の一九三八年初夏の北京滞在にふれている。例えば竹内好と日本浪漫派／保田与重郎の関係を論じる時、一九三八年の北京における竹内と保田の再会はよく取り上げられる。⁽⁸⁾ 佐藤春夫と保田の関係を論じる場合、北京行とその文学的産物もよく研究対象とされている。しかし戦時下、かつ占領区における日中文人交流の一断面として、この「小集」に最初に着目したのは木山英雄の周作人研究である。木山氏は山本実彦が七月に周作人に会見した記事を引用し、保田が唾棄する「北京のインテリゲンチヤ」の注文や皮肉な言い方を確認する。また、竹内好にインタビューし、周作人のせつかくの自然な対応に対する日本文人の無神経さに関する竹内の懸念を伝え、「せつかくの自然な対応すら、日本人の側の政治的な配慮が伴わなければ自然でありえぬくらい、周作人と日本人の間が戦争の壁によって閉ざされていたことを、別の面から示しているわけだ」と論じる。⁽⁹⁾

また、丸川哲史の「日中戦争的文化空間——周作人与竹内好」⁽¹¹⁾は「老人趣味」的話題によって親善会を「脱政治化」しようとした、周作人らの試みに注目する。丸川氏はまた、この「距離設定」に対する竹内好・佐藤春夫・保田与重郎ら三者三様の視線を指摘する。

先行研究はもっぱら日本側（佐藤春夫）と中国側（周作人）のすれ違いを重視するため、竹内好への目配りが足りない恐れがあり、この歓迎会の持つ意義を十分に考察してきたとは言いがたい。筆者は盧溝橋事変の勃発から一年も経たず、「淪陷時期」北京文壇もまだ成立していなかった⁽¹²⁾として、当時の竹内好の具体的な心境を考察しながら、この歓迎会の竹内好にとつての意義について検討したい。

Ⅲ 北京の日本化と竹内好の「悪劣な心境」⁽¹³⁾

北京に着いた後、竹内好は『中国文学月報』に寄せた最初の手紙で「思想と思想の相撃ち」と「文化の相剋・交流」により、新しい思想と文化が生まれる「瞬間」を切に望んでいたと述べている：「僕が私かに期待したものは、混乱の中に生まれ出る荒々しい生気であった。思想と思想の相撃つ火花であった。戦争の伴う急激な文化の相剋、交流——一瞬にして成るであろう破壊から建設へのすさまじい奔流の胸打たれる光景であった。」⁽¹⁴⁾それ故に、竹内は北京文化の再建に対する現地の人々の「冷淡」と北京の「長閑」を不満に感じざるをえない。では、どのような新しい中国文化を望むのか？それは恐らく竹内好自身にもはっきりとは分かっていない。一つ言えるのは、この熱情の冷却に比例し、北京の日本化に対する嫌悪感もつものつていったことである。

事変後の日本人の進出と北京都市景観の変化は、各雑誌の現地記者の報告に生き生きと描かれている。盧溝橋事変直前の一九三七年六月末、北京居留日本人は約四五〇〇名（うち内地人二四〇〇名、朝鮮人二〇〇〇余名）だったが、一九三八年五月末には一万六三〇〇名に上った。領事館、警察に届けを出していない在住者を含めると、一九三八年

八月末の北京在留日本人は約三万と推定される。またその中、会社員と従業員が大部分を占め、所謂「教育家」は少数だったようである。⁽¹⁶⁾一九三八年末には「北京は支那の北京ではなく、日本の北京になった。娯楽が幾分でもエキゾチックなダンスホール趣味から、日本人でなければ判らないカフェーと日本式喫茶店と、料理屋と芸者に移り代わる一方ネオンと豊と、下駄と近代的な日本生活になった」という日本化礼賛の現地報告も見える。北京の日本化が進む一方、「北京の古典的な落ち着きを持つ高雅な雰囲気といふものは毀されていった」⁽¹⁷⁾のは言うまでもなかった。それは長年らく北京に在留した「支那通」⁽¹⁸⁾及び一部の日本人にとつては痛々しいことであつた。

竹内好は早くも留学翌々月、「北京では——少なくとも今の北京では、古いものほど新しいような気がします」と記している。⁽²⁰⁾一九四二年初の中国調査の旅行報告で、竹内好は「余裕」ある筆触で、現在の「すっかり落ち着いていた」北京と対照する為に、留学期間の「ひしめいた」北京の空気に対する、当時の「身もたえするほど嫌悪した」⁽²¹⁾気持ちを次のように述べた：「すさまじい叫喚に、街中がひしめいているような気がした。しばらく街へでないと、もう街の相は変わっていた。うきうきした、開拓者気分だけがあるように思え、そうした空気がいやでたまらず」⁽²²⁾。嫌悪感から竹内好は引越を決意する。この心境について、竹内好は「佐藤春夫先生と北京」でこう語る：「その部屋（最初に住んだ部屋——筆者注）がいやであつたというのは、つまり、支那がいやであつたことである」⁽²³⁾。引越日の五月二五日は折しも佐藤春夫の北京滞在の最中である。しかし、住む環境が閑静になつたとしても、落ち着かない気持ちに変わりはなく、「それ（北京の空気——筆者注）を如何ともしがたい自分の無力さに腹が立つて、否定的な感情だけが募つた」⁽²⁴⁾。

要するに、竹内好の事変に対する彼なりの「興奮」と現地の人々の文化再建に対する冷淡、実際の北京の呈する「落ち着かない景觀」は結局のところ調和しなかつた。「昔ながらの北京」⁽²⁵⁾を求める為、彼は引越さずには居られなかつた。この「昔ながらの北京」は単に都市景觀のことだけを指すよりも、北京の日本化によって「日常茶飯事にならうとして

いる」、「墮落する」北京とは対照的な、「自分だけに愛し、自分だけに知りうると思ひ、それゆえ矜りをもちえた」北京である。従つて、庭、柳の古木、築山、コンクリートの池などの揃つた快適な中国風の新居に身を置いて、精神的な落ち着きを得るところか、むしろ苛立ちがつるばかりだった。五月二十日の歓迎会の時点は、引越の直前という意味で、竹内好は「昔ながらの北京」に戻りたい気分にあつた。日本化一方の北京が象徴していた中国文化の未来を懸念しながら、中国文学研究者の竹内好は次第に「考える習慣を失」⁽²⁷⁾つて「失語症」⁽²⁸⁾のような状態に陥るようになった。彼がこのような状態に陥つた真の原因を考える時、歓迎会の話題である「鬼」はいわば内側から光をあてるものとして、重大な意味を持つのではないかと思う。

IV 「鬼」の発見

一、歓迎会の話題：「鬼」

宴会当日、佐藤春夫は『文芸春秋』の現地報告第二稿「北京雑報」を書き上げた。その中で、佐藤は「自家の生命と生活感情とを尊重する如く、他人の家をも同様にせよ」と唱える「現代知識人」を批判し、彼らの「所謂ヒウマニズム」は動物並みの感に過ぎず、「一切の動物を超えて人の人たる所以は信念によつて理想を確立し、その理想の前に勇往邁進する精神でなければならぬ」と説く。⁽²⁹⁾

この侵略する側の「人間」観は、侵略される側のそれとは明らかに異なる。周作人は早くも一九三六年に「私の考えでは、人間が禽と異なるのはただ人間が理智を持つてゐるからだろう。人間は自分の外に人が居てゐて、自分がまた人の中に居ることを理解してゐるので、二種の対外の態度を取つてゐる。消極的なのは恕であり、積極的なのは仁である。」⁽³⁰⁾と述べてゐる。周はまた戦争中、「中国の思想問題」で中国の中心思想である儒家思想の骨子は「己所不欲勿施于人」の「恕」と「己所欲施于人」の「忠」からなる「仁」であると述べ、特に前者の中に含まれる、他人と「円満に

付き合っていくように」という点を強調し、それは「人間ならではの生存道徳であり、古人が人間と禽獣の違いが稀だと云うが、即ちこのためである。」⁽³¹⁾と繰り返し論じている。動物を超える真の「人間」とは何かという基本的な問題について、侵略側と侵略される側がそもそも正反対の論理を有している以上、彼らの話題がかなり制限されることも想像に難くないだろう。では、一体歓迎会の参加者は何を話題にしたのだろうか。当事者は以下のように記録している：

イ「日本の思い出や支那の食物の話に終始した」（保田・「事変と文学者」）⁽³²⁾

ロ「話題は、料理の話とか、お化けの話など、たあいもない話が多かった」（竹内・「佐藤春夫先生と北京」）⁽³³⁾

「談は多く食物、化物などであった。」（竹内・「周作人随筆——北京通信の三」）⁽³⁴⁾

ハ「話題は料理や、紙芝居、文学、などのたわいもない閑談で終始した」（佐藤・「蒙疆——張家口」）⁽³⁵⁾

以上から、「料理」以外の話題に関しては、三人の記憶が多少異なることが分かる。そもそも宴会中の散漫な会話であり、記憶に残り、特に文章に書きとめた話題も人それぞれであったのだろう。その中でも、竹内一人の記憶に「お化け」が残った点は興味深い。周知の通り、中国の「鬼」は日本の幽霊であり、日本の「鬼」は中国の「悪鬼」、怪物である。文脈から、竹内がここで言う「お化け」とは即ち中国の「鬼」だと判断できる。竹内はなぜ「鬼」⁽³⁶⁾に拘ったのだろうか？その原因は、竹内の周作人の文章に対する理解から窺える。

二、鬼の発見

一九三八年九月号の『中国文学月報』に発表された「周作人随筆集——北京通信の三」は、竹内が松枝茂夫によって六月に翻訳出版された『周作人随筆集』⁽³⁷⁾の書評のつもりで草したものであり、『周作人随筆集』を読んで先生の文章は鬼と談る趣があると思つた」と記している。⁽³⁸⁾この文章は竹内好の二年間の留学期間において、特別な意味を持つている。それはまず、これが前年（一九三七年）の十二月以来八ヶ月ぶりに竹内が『中国文学月報』に載せた文章であ

るといふ点である。次の文章（二年間）、一九三九年十二月発表）が世に出るのは、一年三ヶ月後のことであり、同文は一九三八年における竹内好の唯一の作品なのである。彼は一九三八年五月から翌年十月に留学を終えるまで一貫して「悪劣な心境」、まともな文章の書けない「混沌」たる状態にあり、このような支離滅裂な精神状態は、この通信（三三）からも窺えよう。

この文章で、竹内好は次のように述べる：『周作人隨筆集』で『論語小記』が一番面白かった。：ここに出てくる孔子も丈人も鬼であるが、それを談る周作人も鬼であろう。少なくとも周作人の精神がさまよい出て気圧の低い東洋の虚空に聖人と隠者の無言の問答を黙聴すると云つた思いで、これは『聊齋志異』などにもありがちな構図である。こういう鬼の世界は日本にはない。まして西洋の悪魔は肉体がたくまじすぎる。仙術によるほかない。たとえば屈原と漁夫の問答にしてもあれは東洋の悲哀と僕には思える。：周作人の愛憐は汎鬼論的である。：鬼のほうがいくらか精神に近い気がする。：実際、聖人と隠者の問答はこんなにも面白いものかと思ふ。しかし周作人をもし隠者の側に立たせるとしたら、その見を僕はとらない。：周作人は聞き手であろう。少なくともこの問答では聞き手であつて語り手ではない。その隠者への同情は孔子の隠者への同情より淡泊であらねばならない。これは文学者の態度である。』⁽⁴⁰⁾

三、「隠者に対する同情」：周作人

竹内好の評論を分析する前に、まず彼の絶賛する「論語小記」⁽⁴¹⁾を見てみたい。同文は周作人が一九三四年十二月に書いたものである。周作人は、自分の「論語」読書の結果は「中庸思想を除いては乃ち一点の隠者に対する同情である」と述べ、「中国の隠逸はすべて社会的或いは政治的」で、「論語」に於ける隠者と孔子は「是れその為むべからざるを知りつつ、これを為むる」といふ点では「やはり一つ源流」であり、「ただ一はなほ為めんと欲し、一はもう為めんとは考えないだけの話」であり、諸葛孔明は前者の代表、陶淵明は後者の代表であると述べる。⁽⁴²⁾孔子と隠者の関係に関する

解釈は、周作人の一貫した「現代生活の芸術」観、即ち「知其不可而为之」の「現実干渉」の表れである。⁽⁴³⁾ 隠者の気持ちに寄り添うことは一九二八年に「閉門読書論」⁽⁴⁴⁾を宣した自分の心境表明と言えるだろう。儒家思想の信仰者である周作人の思惟の枠組みは「個」／「我」と「社会」／「他人」の關係に終始すると思う。

四、隠者Ⅱ分身Ⅱ鬼：竹内好

後年、竹内好は別の文章で「周作人隨筆集——北京通信の三」の論議を、次のように分かりやすく説明する：「中国思想において、もつとも興味をひかれるのは、隠者の存在である。孔子を批判した丈人や、屈原を批判した漁夫ほど、孔子や屈原の姿を生き生きと照ら出しているものはない。孔子や屈原が精彩あるのは、自己の対立物として隠者をもつからである。つまり、この場合、隠者はいかれの分身なのであって、近代風に解釈すれば、かれの内心の声といつてもいい。矛盾をふくみ、対立を内包していることで、かれらの思想は生き生きしている。」⁽⁴⁵⁾ 竹内好が『論語』の隠者問答から読み取ったのは「個」の矛盾した内在的思想間の相撃ちである。隠者や漁夫のような、思想の中に潜む、主体と対立する虚無的存在を、竹内は「鬼」と言う。このような虚無との共存／格闘は、竹内好の理解する「東洋（人）の悲哀」である。これはまた占領下の北京にいる竹内の「自身を凝視する」⁽⁴⁶⁾必死な姿勢とも言えるだろう。

この「東洋（人）の悲哀」は、竹内独自の魯迅理解に繋がる：「魯迅の根柢にあるものは、ある何者に対する贖罪の気持ちでなかつたかと私は想像する。何者に対してであるかは、魯迅もはっきりとは意識しなかつたろう。ただ彼は、深夜に時として、その何者かの影と対坐しただけである（散文詩集『野草』その他）。それが、メフィストでなかつたことは確かである。中国語の『鬼』は、それに近いかもしれぬ。⁽⁴⁷⁾あるいは更に、周作人の云う『東洋人の悲哀』という語をここに注釈として援用することは、注釈である限り、差支えない。」⁽⁴⁸⁾最近の竹内好研究者は、しばしば「自己内部の他者」との否定闘争によって主体の不断の更新を獲得する竹内の「挣扎」⁽⁴⁹⁾について注目する。実際、「自己内部の他者」

という言い方を竹内好の言葉に還元すると、それはつまり「鬼」である。

戦争の最中に書いた『魯迅』で、竹内好は繰り返してこの確信を論じている：魯迅において「文学と政治（啓蒙、革命）」が「絶対矛盾的自己同一」という関係にあり、「魯迅は文学者であった。なによりも文学者であった。」この魯迅観は彼の「鬼」をめぐる発想を抜きにしては成り立ちがたいだろう。右に既に引用したが、竹内好は「北京通信の三二で、周作人の「隠者への同情は孔子の隠者への同情より淡泊であらねばならない。これは文学者の態度である」と述べた。難解な文章だが、それは竹内好から見ると、隠者が孔子と周作人にとって同じく対立物としての分身のような存在だが、孔子より「文学者」としての周作人のほうが主体の不断の自己否定によって、内在的他者の隠者との新しい同一性の関係を創出できるはずだということではないだろうか。木山英雄は竹内の『魯迅』の独自性は「時代の反政治主義のため狭い文学世界に閉じこもらないだけでなく、却って文学と政治の対立が『絶対矛盾』まで追い迫られるというところから出発して、両者が頼り合って自己否定すると同時に、真の自我の域を得ることを構想し、ひいては文学の全面的に歴史的な、現実的な政治に関与する可能性を模索しようと試みる、というところだ」と述べる。⁽⁹⁾文学の政治化が強まりつつあった「気圧の低い」戦中にも拘らず（あるいは、だからこそ）、竹内好は取って文学の歴史関与の可能性を主張する。その中で、「鬼」の発見によって自己と内在的他者の格闘から生まれる可能性に対する、彼の必死な望みが潜んでいると言えるだろう。この「なすべからざるを知ってしかもこれをなす」決意は積極的というよりも、むしろ空しく悲涼な感じもしないわけではない。魯迅の場合、それはある何者か（「鬼」）に対する贖罪の気持ちではなかったかと竹内好は想像する。暗黒期の中国に身を置く「文学者」魯迅にとって、贖罪の気持ちが一生涯きまとうものであるように、戦時下日本にいる竹内好も「鬼」と対決する宿命から免れられない。

この「鬼」の発想の源は占領下北京で行われ、周作人も参加した佐藤一行の歓迎会の話題、及び竹内好本人が混沌状態で読んだ周作人の『論語』を論じる文章にまで遡りうると思われる。もともと、あくまでも儒家的思惟の「個」／

「我」と「社会」／「他人」という枠組みにいる周作人に、本当に竹内好の言うように、もう一人の自分をもって、孔子（聖者）と隠者を客観視できるかは疑わしい。例えば、周作人は「両篇小引・一秉烛談序」⁽⁵¹⁾で杜甫の詩「夜闌更秉烛、相对如梦寐」について言及し、金聖嘆の評註を以下のように引用している：「更秉烛」という言い方は絶妙である。生きている人間は寝ることが出来るが、死人は寝られようか。夜更けに相対すること、夢の如しというと、この時は紙銭を作ったり、招魂したりしてくれる人が真に必要なだろう」⁽⁵²⁾。金聖嘆の想像する、夜の鬼と向かい合う情景と、上に引用した竹内の魯迅理解との相似が明らかである。金の解釈に対して周作人は、自分はただその「意境」に興味を持っていただけだと述べ、金の「言い方は気がきいていて趣があるが、私にとって役に立つところは一つもない」と、一言で片付けてしまう。「鬼」か「人」を問わず、「個」としての自足性を追求している周作人に対して、竹内の思惟の枠組みは上述のように、自分の中の主体／他者という構造である。竹内は一九三八年当時の自分の精神の救済を求めて、周作人の「論語」解釈を再解釈したのである。

勿論、「論語」に対する周作人の解釈を竹内好が再解釈することはそれ自体、周作人と竹内好の「論語」／孔子理解に共通点が潜んでいることを暗示する。彼らは共に孔子の「なすべからざるを知ってしかもこれをなす」という儒家の精神に強い共感をいだいている。竹内好はその後も、この「行動の決意」の精神を繰り返し唱えている。⁽⁵⁴⁾それに、「離騷」の「路は漫漫としてそれ修遠なり、われ將に上下して求め索ねんとす」を抜粋して「彷徨」の題辞とした魯迅を発見し、「なすべからざるを知ってしかもこれをなす」との基準によって、孔子、屈原、魯迅を同じ系列の人間として位置付けている。ただ、このような位置付けの後、竹内はすぐに魯迅は孔子と本質的には近いが「あらわれ方は否定的である」⁽⁵⁵⁾と付け加え、あくまでも内在する他者との格闘による、主体の持続的更新という思惟の枠組みに固執するのである。

五、「分身」発想の由来：屈原と漁夫

竹内好と周作人のズレを象徴するもう一つの例であるが、竹内好の「周作人随筆集——北京通信の三二」では、孔子と隠者の話と同じ「東洋の悲哀」の表象として、周作人の「論語小記」にはない屈原と漁夫の話が取り上げられている。竹内好の視点は周作人よりもむしろ、屈原の作品「漁夫」を論じる梁宗岱の文章により近い。一九三五年九月発行の『中国文学月報』第七号に掲載された「詩を談る」で、梁宗岱は次のように述べている：「卜居」と「漁夫辞」は頭かに屈原が作って自ら解め自ら慰めたものである。所謂「人家の杯酒を借りて、自己の塊墨に注い」だものである。「漁夫」と「卜居」は何れも屈原自家の化身に過ぎない、——現代語を用いていふならば、／＼支那古代文学史中善く「自我の化身」を用いたものに、屈原を外にしては、莊子と陶淵明がいる。⁽⁵⁶⁾この表現は上に引用した竹内好の一九五三年の文章と照らし合わせると、両者の相似は一目瞭然である。竹内好は勿論、梁宗岱のこの文章を読んでゐる。それも単に目を通しただけではなく、その中の「自我の化身」などの言い方からかなりの印象を受けたと言えるだろう。一九三八年に周作人の「論語小記」を読んだ際、孔子と隠者のやりとりや陶淵明の箇所に触発された竹内には、梁宗岱の文章に対する印象がすぐに記憶に蘇つたのだろう。⁽⁵⁷⁾

また、佐藤春夫は「漁夫」の話をもとに「屈原」⁽⁵⁸⁾という詩劇を書いたことがある。竹内好の一九三八年八月十九日の日記には「佐藤春夫に屈原をうたえる詩劇あり」との記述が見られる。ただ、「周作人随筆集——北京通信の三二」を掲載した『中国文学月報』九月号は、八月二五日に印刷納本されているので、この文章の執筆当時、竹内が佐藤の二年前の作品「屈原」を読んだか否か、今の段階では確認できない。しかし、わざわざ日記に記録したことは、既にそれ自体、竹内好が屈原と漁夫の問答に含まれる自己救済思想の可能性に惹かれていたことを物語っている。

六、「東洋（人）の悲哀」

一九三五年、竹内好は梁宗岱による屈原の「漁夫」を論じるエッセイにおいて「自我の化身」という言葉に出会う。一九三八年には、周作人の孔子と隱者を論じる「論語小記」を読み、聖者と隱者の関係の延長線で、屈原と漁夫の関係を思い出す。またこの間の佐藤一行歓迎会の「鬼」に関する話題も記憶に浮かぶ。そこで竹内は、周作人も孔子も隱者もみな鬼であり、「周作人の精魂がさまよい出て気圧の低い東洋の虚空に聖人と隱者の無言の問答を黙聴する」⁽⁵⁹⁾という、周作人の原意を離れた解釈に到達したのである。「内在の他者」という存在を「鬼」と名づけるのは、この間の歓迎会の話題とも、また竹内自身が「鬼」に対して持っていた「虚無」のイメージとも関係している。一九三八年の文章で、彼は「鬼のほうがいくらか精神に近い気がする。精神とは恐らく哲学であろう。哲学とはあるいは虚無かもしれない」⁽⁶⁰⁾と述べている。また、周作人の言う「東洋人の悲哀」に漂う「果敢なく頼りなく望みなく、この世は唯だ夢とのみ訳もなく嗟嘆せしむるもの」⁽⁶¹⁾と似た雰囲気のためか、虚無の分身との「無言の問答」を竹内好は「東洋（人）の悲哀」と形容したのである。

VI まとめ

「盧溝橋事件」の翌年、北京大学をはじめとする大学の教授及び文化人の大量南下と都市景観の急速な日本化などによって、かつての北京の文化的アイデンティティとしての魂は既に失われてしまったかのような状態にあった。この一方的な日本化は即ち自己否定と「抵抗」を伴わない変化であり、十年後に竹内好が批判することになる「転向」型の日本近代化⁽⁶²⁾と相似しているだろう。勿論、北京の一方的な日本化が日本占領のもたらした結果も考慮しなくてはならない。その際に、日本化の原因を地元の事情に帰するか、其れとも日本の戦争政策に帰するか、竹内好は一人の日本人として、深く苦悩したことであろう。北京の日本化に対する批判がいわば「外部への批判」のようだが、それは「同時に自分の

内部にある暗黒と闘うことでもある」だろう。従って、丸山真男は竹内好の北京留学二年間の日記を読んで、引返す途もない「自己解体」という意味で「もつと奥底の精神的回心ということになると、ぼくの推測は北京時代に遡るんです」と述べる。⁽⁶⁴⁾

このような北京時代において、一九三八年五月二十日の佐藤春夫歓迎会は竹内好にとつて特別な意味を持つと思う。この歓迎会は占領下の北京における日中文化交流の縮図といえよう。段取り役の竹内好は自然体の集まりにしようとして工夫したが、もともと真の「一人」の定義すら一致していない占領国の国民と被占領国の国民との間では、「人間」の話題は避けざるをえず、この歓迎会は心の通わぬ「交流」に終わる宿命であった。ただ、その中で、中国文学を自分の血の中にとりこめず、「現実の中国との一体化」⁽⁶⁵⁾のできぬ苦境に呻く竹内好は、歓迎会の「鬼(幽霊)」の話題に深い印象を覚え、日本化一方の北京での自分の混沌状態から脱出する一つの手段として、中国の「鬼」に「自己の対立物」を寄せるといふ可能性を見出したのではあるまいか。その後、彼は「鬼」に啓発された「不断の自己否定・更新」の道を辿っていく。そして、終始自己の内面を凝視し、内在する「他者」と格闘するということを中国現代文学と日中近代化を考察する際の視点として構築していく。日中関係史における不幸な一時期に日本占領下の北京で開かれた主客すれ違いの奇妙な歓迎会は、竹内好の幻滅に行動化・抵抗の契機を与え、彼の思想形成に大きな影響を及ぼしたといえよう。

注

(1) 竹内好「佐藤春夫先生と北京」『文学通信』第八号 一九四二年二月『竹内好全集』第十四巻 筑摩書房 一九八一年十二月、二九〇頁。

(2) 五月五日「武漢文化界抗敵協会」が周作人糾弾の宣言を発する。

五月十四日夜、文藝春秋社の特派員佐藤春夫、その甥竜児と『新日本』からの特派員保田与重郎は「昭和——筆者注」三三年四月の終わりから、事変下の朝鮮満州を巡遊して「北京に入る」。

同日、『抗戦文芸三日刊』第四期に茅盾、郁達夫、老舍など十八名の作家の署名による「周作人に与える公開状」が出る。
五月十五日「雨の中を佐藤春夫、同竜児、保田与重郎の三氏、日中実業の全崎氏に伴われ」竹内好の家を訪ねる。午後景山に登る。その後何日か、佐藤一行は「北京の名勝を順歴していた。東嶽廟、国子監、孔子廟、雍和宮、隆福寺など」。

五月二十日 周作人は燕京大学中文系主任、郭紹虞が自ら送り届けた講師の辞令を受け取る。

同日、竹内は「尤君（炳圻）とはかり」、「周、銭（稻孫）、徐（祖正）の諸先生をも招き、一夕の宴を催す」。

佐藤、現地報告「北京雑報」を発送する。

周作人、「題古槐書屋制箋」を書く。

五月二十二日 竹内、神谷正男と佐藤一行及び桜井中佐は、盧溝橋見物。

五月二十三日 佐藤は「赤痢の疑がある」ので、同仁病院に入院。入院の一週間、竹内は毎日、佐藤を見舞う。

五月二十四日 保田と竜児は張家口、大同に出発。

五月二十五日 竹内好、椿樹胡同から東四牌楼七条四十三号に引越する。

五月三十日 佐藤春夫、退院する。

六月 二日 竹内、ホテルに佐藤氏を訪う。

六月 三日 保田、早朝承德へ発つ。夜、竹内は「佐藤氏を訪い、種々の話をきく。朝鮮文化の話面白し」。

当日、陝甘寧辺区文化界救国協会は周作人糾弾の電報を発信する。

六月四日 夜 竹内は佐藤を訪ねるが、佐藤は「支那通」の村上知行と聴劇に赴いていた。

六月五日 朝 竹内は「ホテルに佐藤氏を訪う」。「ホテルにて三人（竹内、佐藤、竜児——筆者注）共に夕飯。お春さん魅力あり。六時半の汽車にて佐藤先生発たれるを神谷君と共に送る。」

この注釈は本論文の論旨と関係あると思われる事項を、主に以下の資料を参照にまとめたものである：①張菊香・張鉄栄編

『周作人年譜』天津人民出版社 二〇〇〇年四月、五五〇頁 ②保田与重郎「事変と文学者」『文明評論』一九四〇年六月、

後に単行本『佐藤春夫』（弘文堂、一九四〇年二月）に収録。『保田与重郎全集』第十卷 講談社 一九八六年八月、九三

頁 ③佐藤春夫「北京雑報」『文藝春秋』（時局増刊九）第十六卷第十号 一九三八年六月。臨川版『佐藤春夫全集』第二七

卷 二〇〇〇年一月、一三一頁 ④竹内好 『北京日記 一九三八』、『竹内好全集』第十五卷 筑摩書房 一九八一年十月
二二四〜二二六頁 ⑤佐藤春夫 「蒙疆——張家口」 『文藝春秋』(時局増刊十) 第十六卷第十二号 一九三八年七月。『佐藤春
夫全集』第二七卷、一三八頁。

(3) 「一夕、僕らで先生の歓迎の宴を催した。僕らというのは、僕及び尤炳圻、方紀生ら若いものたち、賓客側は先生の一行のほかに周作人、錢稻孫、徐祖正その他の諸先生であった。場所はたしか西四の同和居であったと思う。：席の空気は終始なかでであった。話題は、料理の話とか、お化けの話など、たあいもない話が多かった。若い連中がみな無口なので、主に賓客側がしゃべった。文学や政治の話はほとんど出なかつた。もちろん歓迎の言葉など改まったものはなかつた。昨日会った人間のように、勝手にしゃべりたいことをしゃべっていた。要するに老人趣味なのである。よく云えば北京趣味である。」竹内好 『佐藤春夫先生と北京』、二九〇頁。

(4) 『佐藤春夫全集』第二七卷、一三九頁。

(5) 一九三八年七月の日記に、「九日：夜、出で『文芸春秋』増刊号(佐藤春夫氏の文あり)を買い、二十日：(帰国する神谷に——筆者注)佐藤氏宛本：を託す」 『北京日記 一九三八』、二二二頁。

(6) 佐藤春夫 「日華文人の交流」 『朝日新聞』一九四一年四月二二、二三日 『佐藤春夫全集』第二二卷 一九九九年八月、一五九頁。

(7) 竹内好 「佐藤春夫先生と北京」 二九一〜二九二頁。

(8) 松本健一 『竹内好論・日本浪漫派との決別の章』 岩波現代文庫 二〇〇五年六月、橋川文三 「竹内好と日本ロマン派のこと」 『文学』四五巻十号 一九七七年十月など。

(9) 神谷忠孝 「佐藤春夫と保田与重郎」 『国文学 解釈と鑑賞・佐藤春夫の世界』第六七巻三号 二〇〇二年三月。

(10) 木山英雄 「周作人「対日協力」の顛末：補注「北京苦住庵記」ならびに後日編」 岩波書店 二〇〇四年七月、一〇二頁。

(11) 広州：『開放時代』 二〇〇六年一月号。

(12) 張欣 「梅娘と『淪陷時期』北京文壇」 『東洋文化研究所紀要』第一四一冊 二〇〇一年三月。

(13) 竹内好 「周作人隨筆集——北京通信の三」 『中国文学月報』第四二号 『竹内好全集』第十四卷、一一九頁。

(14) 「北京通信 一」 『中国文学月報』第三三号 『竹内好全集』第十四卷、一一〇頁。

- (15) K. Y. 「北京だより」『文藝春秋』一九三八年十月号、二六二頁。
- (16) K. Y. 「北京だより」『文藝春秋』一九三九年一月号、三四五頁。
- (17) 村上知行 「北京一年」『文藝春秋』一九三八年七月、一二〇頁。
- (18) 「北京の風物趣味と文化の精髓にあこがれている文人にとつて、新北京の市中の姿は日一日と昔の花の色が褪せてまいり、カプエー、おでんや、お手料理などの文字が大路小路随所に目につくので、如何にも北京の真面目にたいして惜しい気持ちになつてゐる。…古い北京の深みとその持ち味をかなり棄てさせてしまつて、日本の下駄家、畳屋、障子屋、料理屋の殖えていくのはどう見る。」後藤朝太郎 『支那生活案内』黄河書院 一九四〇年二月、三六五頁。
- (19) 竹中伸 「老北京随想(一)——老北京」『老舎小説全集月報一』学習研究社 一九八一年十月、六頁。
- (20) 「北京通信二」『中国文学月報』第三四号 『竹内好全集』第十四卷、一一八頁。
- (21) 「旅日記抄・北京」『中国文学』第八五号 一九四二年七月 『竹内好全集』第十四卷、三九七頁。
- (22) 「蒙疆の印象・初旅」『蒙古』一九四二年八月号 『竹内好全集』第十四卷、三八二頁。
- (23) 「佐藤春夫先生と北京」、二八九頁。
- (24) 「佐藤春夫先生と北京」、三八二頁。
- (25) 「佐藤春夫先生と北京」、三八二頁。
- (26) 「佐藤春夫先生と北京」、二九〇頁。
- (27) 「北京通信の三」、一三三頁。
- (28) 竹内好 「二年間——黙することの難ければ」『中国文学月報』第五七号 『竹内好全集』第十四卷、一二四頁。
- (29) 佐藤春夫 「北京雑報」『佐藤春夫全集』第二七卷、一三三頁。
- (30) 周作人 「『逸語』と『論語』」『宇宙風』第十五期 一九三六年四月、後『風雨談』に収録。原文：「据我想，人之异于禽者就只为有理智吧，因为他知己之外有人，己亦在人中，于是有两种对外的态度，消极的是恕，积极的是仁。」周作人の作品は主に鐘叔河編『周作人文類編』全十卷（長沙：湖南文艺出版社 一九九八年）による。
- (31) 周作人 「中国の思想問題」一九四二年十一月十八日作 『中和月刊』一九四三年一月号 後『知堂雑文』に収録 原文：「(后者乃是)人所独有的生存道德，古人云人之所以异于禽兽几希，盖即此也。」

- (32) 「事変と文学者」、一〇二頁。
- (33) 「佐藤春夫先生と北京」、二九〇頁。
- (34) 「周作人随筆——北京通信の三」、一二〇頁。
- (35) 「蒙疆——張家口」、一三九頁。
- (36) 以下の「鬼」は全て中国の鬼のこと。
- (37) 松枝茂夫訳『周作人随筆集』改造社 一九三八年六月。訳者によると、この随筆集は一九二二年から一九三六年まで、周作人の「七八百篇を越すかと思ふ」随筆から「適宜に選んで訳出したものである。」(訳者あとがき)
- (38) 「周作人随筆集——北京通信の三」、一二二頁。
- (39) 「去年北京へ来てから三、四月頃までの生活の印象はあざやかである。…それ以後のはあざやかでなし。」『北京日記 一九三八』(十二月四日)『竹内好全集』第十五卷、二六六頁。
- (40) 「周作人随筆集——北京通信の三」、一二二頁〜一二三頁。
- (41) 周作人「論語小記」「水星」月刊第 卷第四期 一九三五年一月、後『古茶随筆』に収録。
- (42) 原文：「我从小读《论语》、除中庸思想外、乃是一点对于隐者的同情」、「中国的隐逸都是社会或政治的」、「知其不可而为之」、「说到底、二者还是一个源流……不过一个还要为一个不想再为罢了」。松枝の訳文による。
- (43) 「苦茶随筆・小引」(一九三〇年十一月作 『東方雜誌』第二九卷第一期、後『苦雨齋序跋文』に収録)、「苦茶随筆・後記」(一九三五年六月作)、「自己的文章」(一九三六年九月作 『青年界』第十卷第三期、後『瓜豆集』に収録)
- (44) 「閉門読書論」一九二八年十一月作、『永日集』に収録。
- (45) 「根本誠著『専制社会における抵抗精神』」(書評)『早稲田学報』一九五三年一月号 『竹内好全集』第十二卷 一九八一年八月、二五五頁。
- (46) 丸山真男「竹内日記を読む」『ちくま』一九八二年九月号 『丸山真男全集』第十二卷 岩波書店 一九九六年八月、三一頁。
- (47) 丸尾常喜『魯迅「人」「鬼」の葛藤』(岩波書店 一九九三年十二月)は歴史、思想史、宗教、民俗学などの豊富な研究成果をふまえ、魯迅と周作人における「鬼」の象徴的意義と作品における投影を綿密に解明する。

(48) 『魯迅』 日本評論社 一九四四年 『竹内好全集』第一卷 一九八〇年九月、七頁。

(49) 孫歌「竹内好という問い」 岩波書店 二〇〇五年五月、代田智明「竹内好という問い」(書評) 『中国研究月報』二〇〇六年二月号。

(50) 木山英雄「也算经验——从竹内好到『鲁迅研究会』」(経験たるか——竹内好から『鲁迅研究会』まで) 北京：『鲁迅研究月刊』二〇〇六年第七期、二九頁〜三〇頁。原文：「它不但没有由于时代的反政治主义而躲入狭窄的文学世界，而是相反地从文学与政治的对立被逼迫到『绝对矛盾』的地点出发，构想两者相互依据对方而在自我否定的同时得以唤醒真的自我的场域，甚至试图摸索文学全面参与历史的和现实的政治之可能性。」

(51) 『兩篇小引・一秉烛談序』 一九三七年四月作、『秉烛後談』に収録。

(52) 同上。原文：「更秉烛炒。活人能睡，死人那能睡，夜阑相对如梦，此时真须一人与之剪纸招魂也。」

(53) 同上。原文：「虽然说得新奇可喜，于我却无什么用处。」

(54) 「理想の行われ難いこと、目前の憂慮すべき事態、それは、ある場合には去るものの理由となり、またある場合には、空しさに向かって努力を積むものの励みともなるのである。」(「蒙疆の印象・初旅」、三八五頁。

(55) 『魯迅入門・伝記』 一九五三年六月 『竹内好全集』第二卷、七二〜七三頁。

(56) 松枝茂夫訳、八十頁。

(57) 一九三七年六月の『中国文学月報』に載せられる「屈原的性格への憧憬」(梅村良之)に「漁夫の恬淡性」は「屈原の性格に於いては、反撥すべき」ものだという論述がある。この文章も竹内好の「自我の化身」思维に加担するか。

(58) 『屈原』『新潮』第二三卷第七号 一九二六年七月 『佐藤春夫全集』第十八卷 二〇〇〇年十二月。

(59) 『周作人随筆集』北京通信の三、一二二頁。

(60) 『周作人随筆集』北京通信の三、一二二頁。

(61) 永井荷風「江戸芸術論・浮世絵の鑑賞」周作人「東京を懐う」(一九三六年八月作 『宇宙風』第二五期、後『瓜豆集』に収録)に引用される。また、「東京を懐う」も松枝茂夫訳の『周作人随筆集』に収められる。

(62) 「中国の近代と日本の近代——魯迅を手がかりとして」『東洋文化講座』三卷 白日書院 一九四八年十一月 『竹内好全集』第四卷 一九八一年一月。代田智明「論竹内好：关于他的思想、方法、态度」(竹内好論：彼の思想・方法・態度に關し

て) 『世界漢学』第一期 一九九八年十月、六七〜六八頁。

(63) 佐々木基一 「私にとつての魯迅」 『魯迅と現代』(佐々木基一・竹内実編 勁草書房 一九六八年)、二二五頁。引用部分は魯迅についての論述だが、北京時代の竹内好の心境にも合うと思われる。

(64) 丸山真男 「竹内日記を読む」、三三頁。また岡山麻子は丸山真男の「推測」と「自己解体」説を受け、竹内好が北京時代で体験した精神危機は自己解体を迫るほど深いものであったが故に、岡本かの子の小説への傾倒や恋愛の経験などによって、「生命や存在の凝視を掴む精神の画期とすることが可能になった」と指摘している。しかし、「中国」という存在を抜きにして、竹内の北京時代を単に個人的精神面のレベルで論じていること、また、その二年間を「文学精神」の解体から再生に至る精神形成の自足的過程として片付けるといふ見解に対して、筆者は疑問を覚える。(岡山麻子「竹内好の『北京日記』——文学の解体と再生」『社会文化史学』第四四号、二〇〇三年一月)。

(65) 「私と周囲と中国文学」『中国文学月報』第二二号、一九三七年二月 『竹内好全集』第十四卷、七二頁。

(66) 松本健一 『竹内好論』、五二頁。

(67) 小熊英二も竹内好におけるこの「従来からの思想」を重視する。彼は竹内の卒業論文「郁達夫論」(一九三三年十二月)にこの基本思想がすでに見られると指摘し、よくこの思想を「自己の苦悩を掘り下げることで他者の苦悩につながる」という表現でまとめる。だが、竹内好における郁達夫から魯迅への移行の内在的原因について、説明不足のおそれがあるだろうと筆者は思う。(小熊英二『「民主」と「愛国」戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社 二〇〇五年十二月、三九八〜四一五頁 四二一〜四三三頁)。